

ドキュメント構成

蓮池さんに
何が起きたのか

「24年」という時間をおもう。
大半の在学生の、生まれてからの時間よりさらに長い。
1978年7月、蓮池薫さんと奥土祐木子さんの拉致事件は起きた。
日朝首脳会談で「生存」が確認され、
“一時帰国”を果たしてから現在までを、
新聞報道などを交えて再構成する。
何が起き、何が判明し、どう事態は変化したか——。

本誌編集室十学生記者・小野光雄

5人がチャーター機のタラップを下りる。蓮池薫さんと奥土祐木子さん夫妻は腕をとりあっていた。その前に地村保志さん・浜本富貴恵さん夫妻、うしろに曾我ひとみさん。蓮池さんは、途中もう一度、祐木子さんの腕をとって、しっかりと組み直すような仕草をみせた。北朝鮮で夫婦が腕を組んで歩いたりする習慣が普通にあるのかどうか、それさえ私たちはよく知らない。

むろん、それは「仲むつまじい」光景にちがいがなかった。「ふたり仲良く、手を組んでタラップを下りてきた途端に涙が出た」と、母・ハツイさん（70）は記者会見でまずその感想を語った。

10月15日午後、拉致被害者5人の24年ぶりの帰国を伝える羽田空港からのテレビ映像は、日の丸の小旗を振って出迎える家族を映しだしていた。なかに、「C」の小旗が見えた。ハツイさんと、父・秀量さん（75）の手には中央大学のフラッグが握ら

れていた。「（私のなかでは）いまも24年前の薫、中大生の薫」と語っていた言葉がよみがえった。

5人の胸には「金日成バッジ」、それに拉致家族の願いをこめた「青いリボン」も揺れている。NHKのアンゲルは、地村さんや曾我さんがそれぞれの肉親らと抱き合う涙の感動をながくアップでとらえ、蓮池さんの姿はしばらく見えなかった（民放にチャンネルを回すと、背を折るようにして、蓮池さんが、父を、そして小柄な母を両手で抱きしめている。くしゃくしゃな顔。それから2つ違いの兄・透さんと互いに強く抱き合った）。

カメラがパンして映し出したのは、そのあとの兄と弟だった。少し距離がある。そこだけ、異質な空気が流れているようでもあった。長身、まわりの人たちから頭一つ抜き出た「視線」で、向き合っている。「情」の場面とは別に、二人だけの「理」の対面とっていいのかもしれない。

れなかった。

「学籍回復、復学を祈念」

9・17理事長・学長コメント

《……中央大学は、蓮池さんの復学の意思が確認され次第、学籍を回復することを決定しております。

一日も早く、蓮池さんが無事に帰られ、再び中央大学で学ばれることを、母校の関係者一同祈念しております》

中央大学は阿部三郎理事長と鈴木康司学長の連名で、いち早くコメントを発表した。9月17日。日朝会談で「生存」確認のニュースが流れたその日の夕方である。大学の対応としても異例の、特記すべきすばやさといつてよかった。読売、朝日など各紙が多摩版、一部は社会面でこれを報じた。

コメントの前段、全文をひく。

《1978年、当時中央大学法学部3年生でありました蓮池薫さんが、新潟県柏崎市の実家に帰省中、

突然に消息を絶つてから24年が経過いたしました。この間のご両親の思いは察するに余りあります。

このたび、小泉首相の訪朝により、蓮池さんの生存が確認されましたことは、誠に喜ばしい限りであります。しかしながら、多数の方々が亡くなられていることは、同じ日本人として、心から憤りを感じます》

学籍番号「76A1122014G」。76年入学、「法学部・法律学科」在籍がしるされている。3年次の78年「消息不明」となったあと蓮池さんの両親は息子の学費を払いつづけた。在籍年限の8年に近い83年7月1日、除籍。

その除籍を元に復す、「学籍回復」について、法学部教授会が、「本人が帰ってきて希望したら認めたい」との方向を確認したのは98年6月である（詳細は長内了・当時法学部長インタビュー参照）。同16日付朝日新聞は〈息子帰れ「大学も待つ」〉〈学籍回復、認める方向〉との見出

して、《両親が五月末、中央大学長や法学部長らに「学籍回復」を求めて出した手紙に対し、大学側は、蓮池さんの消息がわからないまま……学籍回復の是非を検討するという異例の対応をとった》と報じている。

歴史が動き、悲劇が残った

事態は劇的に動いた。9・17日朝首脳会談で、金正日総書記は北朝鮮による「国家犯罪」の事実を認め、謝罪した。「拉致問題について説明したい。……1970年から80年代初めまでの間に、特殊機関の妄動主義者や英雄主義者がやった」「関係者はすべて処分した。おわびしたい。二度と許すことはない」。同時に、8人が死亡、生存者は5人」の安否情報に日本中が激震する。まさしくへ歴史が動き、悲劇が残った（朝日新聞「時時刻刻」）のである。

新聞・テレビの直後の世論調査では、ほぼ8割が会談の意義を認めつ

つ、拉致と生死情報への「否」が同じ8割を占めた。

「めぐみは犠牲になり、（拉致事件を明るみにだす）使命を果たしたのだと思います。人はいずれ死んでいきます。めぐみは本当に濃厚な一歩を残していったのだと思います」。母・横田早紀江さんの言葉は、「死亡」とされた家族の慟哭と疑念を深く語って、凜たる響きがあった。

そして、蓮池さんは還ってきた。「本人がタラップから下りてきて、お互い確認しあったような格好で、男同士の手を握り合っているか、あの瞬間が私には忘れることができなと思います。あの瞬間を忘れることな……」。父・秀量さんの言葉にも、万感の重みがにじんだ。

「たばこの火を貸してくれ」 殴打、袋詰めして北朝鮮へ

海峡の向こうの、閉じられて、凍結した時間。その間の出来事が、かすかだが、すこしずつ明らかになり

つつある。24年前、蓮池さんに何が起きたのか。

——78年7月31日。夏休みで新潟

県柏崎市の実家に帰省中のことだった。薫さんは夕方、「手形・小切手法」のレポート執筆の手を休め、家族に「ちよつと出てくるね」と声をかけて近くの旧市立図書館（現柏崎ふるさと人物館）の自転車置き場に向かった。サンダル履きにTシャツ、財布を置いて小銭だけをもって（透さんの話）。祐木子さんは、母や職場の人に薫さんとの交際を伝えていた。その日もデートの約束があると

言って職場をあとにしている。そして、ふたりは、消えた。

「夜10時ごろ、寝る時間なのにいないな、と思ったけど、夜中にでも帰るだろうと思っていた」とハツイさんはのちに新聞の取材に語っている。翌日になっても帰らないので父が奥土さんの家に向いた。

「娘さん帰ってきましたか」
「いや実はうちも」

それで大騒ぎになったのである。図書館には自転車置き去りにされているのが見つかった。当時薫さん20歳、祐木子さん22歳。



78年7月31日、自宅に残された課題レポートの表紙、書きかけの状態で、16枚まで進んでいた（15ページ参照）

北の厚遇

いま45歳と46歳となった夫妻は、9月末からの政府調査団の現地聞き取り調査に対して、「（同市の）中央海岸で襲われ、袋詰めにされた」と語っていたことがわかった、とわずかに読売新聞（10月7日付）が伝えている。

帰国しても拉致状況については沈黙が続いた。

「海岸で『たばこの火を貸してくれ』と近づいてきた男たちに、後ろから襲われた」と、蓮池さんが口を開いたのは帰国6日め（21日）である。抵抗すると顔を2発殴られ目のあたりが腫れあがった。奥土さんは殴られなかったが、ふたりとも袋をかぶせられて船に乗せられ、着いたのは北朝鮮の清津（チョンジン）だったという。

突然、複数で襲い袋詰めにする手口は、78年7月福井・小浜市から拉致された地村・浜本さん、同年8月新潟・佐渡島から連れ去られた曽我さんも共通している。

北朝鮮に連れ去られてから、ふたりは離ればなれになる。互いの消息を知らされないまま別々の生活を強いられたのち、80年5月に結婚。子供は一人、と伝えられたが、20歳の長女と17歳の長男がいて、ともに大学生という。

5人は、「北の生活」については家族や友人らに多くを語っている。空港からホテルに向かう車中で、透さんがCDを見せながら——

兄「これ知らないだろう」
弟「ばかにするなよ。知ってるよ」
そんな場面もあったという。

「朝食は（祐木子さんの）手料理でほぼ日本と同じものを食べている」「手打ちうどんとか天ぷら、焼き肉も月に1、2度は食っているよ。好物はカツ丼」……

仕事は「社会科学学院民俗研究所翻訳員」。同じ職場の地村さんの説明

では、月給は一般労働者の3倍以上に相当する「4200ウオン」という。破格の厚遇を思わせる。平壤市内の居住地域も「特殊機関で働く、特権階級の集落」といった見方が一般的だ。そして同じ場所に、横田めぐみさんが「一時期まで住んでいた」（15歳の）子供のことはよく知っている」といった5人揃っての、集中的な証言が、また私たちを驚かしたのである。

実名公表の不安、危惧

横田めぐみさんの両親が「実名」を公表したのは97年2月である。「実名を出すことで娘や息子の命が危なくなるのではないか」。どの家族にもその不安があった。国内でも革新勢力を中心に「拉致はデッチあげ」「空想の産物」とする声も強かった。メディア・リテラシー、報道の検証も問われるだろう。

「アベック3組、ナゾの蒸発」「外

国情報機関が関与？」と初めて報道したのは80年元日付の産経新聞である。他紙は長く「後追い」しなかった。拉致問題がようやくメディア一般の注目を浴びていくのは、「横田めぐみさん拉致疑惑」（97・2・3）のスクープ以降だ。同年の新聞協会賞受賞。10月14日付同紙「マスコミ報道を検証」は取材の舞台裏と各紙の報道ぶりを点検している。

家族が名乗ること自体が言いしれぬ不安と勇気と多大な時間、20年を要したのだった。蓮池さんら他の家族も横田さんにつづき、1カ月後、「家族（連絡）会」が生まれた。政府も初めて「拉致の疑いは7件10人」と認定した（その後「8件11人」↓「10件15人」と変わり、現在は「7人」80人」としている）。

「元中大生」への支援

98年8月、蓮池さんの両親あてに1通の手紙が届く。差出人は「外務

大臣 高村正彦」——《私は外務政務次官としても北朝鮮による拉致の問題に携わっておりましたが、この度外務大臣を拝命し、この問題の解決に向けて最大限の努力をしていく決意を新たに致しました》

高村氏は65年中央大学法学部卒。大学の後輩にあたる息子の救出を訴える両親の手紙に対する直々の「拝復」だった。

中大では在学生有志で「学籍回復を求める」活動もはじまり、「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」となって現在に続く。

——9月29日、多摩キャンパスでは「ホームカミングデー」の催しが開かれた。ことしは82年卒のOBらが招かれた。この日、蓮池さんの45歳の誕生日。席上、阿部理事長は、

「（蓮池さんは）本来ならば昭和55（80）年の卒業生として、一昨年のホームカミングデーのメンゲストとして母校を訪問していただけたはずだったことを考えると、誠に残念

なことであります」と冒頭で触れ、鈴木学長ともども「復学の意思が確認されれば、学籍を回復することを以前より決定している」と大学の対応を改めて語った。

当日、渡部一実代表幹事ら「救う会」メンバーによる「蓮池さんが白門を再び見る日まで!!」の呼びかけに、OBらの関心も高かった。参加者の3割を超える360人が署名、募金も10万円以上に達し、各紙が一部写真付きで報じた。

そして帰国2日めの夕、報道陣シャットアウトの中で、蓮池薫さんと「救う会」メンバーとの《面談40分》は、新聞、テレビの取材クルーを翌未明まで走らせたのである。

翳り——兄と弟

ハツイさんは息子を思いながら、「出すあてもない手紙を書き続けた」という小さな記事が東京新聞（10月3日付）にある。《「ご飯

食べてますか」「寒くないですか」

……。寒い日には「着るものはあるのかな」と心配になり、北朝鮮の食料不足のニュースを聞くと「コメがまた取れない。ちゃんと食べているだろうか」と思い悩む日々を送った。

「いつか読んでもらえる日が来ると信じていた」。手紙を出すことはできず、便せんの束は年々厚くなっていった》

そんな家族の表情が一転、かげりを帯びるのは10月3日、北朝鮮での政府調査団が撮影したビデオを見てからである。父・秀量さんは「ちょっと怖ろしいような」と言葉少なに語り、「洗脳(されている)」という言葉に葉を透さんは口にした。

透さんは「家族会」の事務局長をつとめている。弟を出迎えて以降の表情も一貫して厳しかった。

「ちょっと先走って聞いたのですが」と、帰国して早々、兄弟の会話はいきなり核心に及んだことを、夕方の方の記者会見で話した。

兄「事件の発生状況はどうだった」

弟「まあ今はいいじゃないか。いざれ話そう」

兄「他にも行方不明の人がたくさんいるが」

弟「後でゆっくり話そう」：

ふるさとのおごみと葛藤

10月17日、5人は地元に戻った。

「いま、私は夢をみているようです。人々のところ、山、川、谷、みんなあたたかく美しく見えます」と曾我さんは嗚咽しつつ佐渡帰郷の心境をうたうように語った。「24年ぶりのふるさと」の映像はそれぞれに心をなごませるものがあった。

地元の人たち、恩師・同級生らとの再会。肩をたたき合う。酒を飲み交わす。19日には、蓮池さんは、中学野球部時代の仲間と野球に興じた。それに、待ちかねた、未明までの麻雀。両大家族ぐるみで赤倉温泉への旅(22〜23日)……。

5人には19日までに日本旅券が発給され、地村さん夫妻につづいて蓮池さん夫妻も25日、婚姻届けを出した。一緒に、子供たちの、日本名による出生届けも。

結婚報告の笑顔で始まった蓮池夫妻の記者会見は、だが子供のこと、に質問が及ぶととたんに空気が重くなった。祐木子さんは目にハンカチを当てたまま言葉にならず、蓮池さんが「子供たちのことは私に責任がありますので私が」と引きとり、「日本人であることも、全部そのまま話すつもりです」。前日、政府が決定した「5人は永住帰国の方向で日本で生活してもらい、子供の帰国を北朝鮮に強く要求していく」との方針

については、「ノーコメントにさせてください」と言及を避けた。

透さんは、「とにかく子供のこと、が大事で、子供を連れて帰るためにはいったん帰らなきゃいけないと言っていたが、政府の決定には肅々と従ってくれる、と思っっている」と

コメントした。同時に、冷静にこんな感想も披露している。「彼の心の中には二面性があつて、日本人としての意識と、朝鮮公民としての意識があり、彼の思いは揺れている。朝鮮公民という意識は固いものがある」

友人らとの間で「お前、洗脳されているんだよ」「そうだよ、洗脳されているよ」という激しいやりとりもあったという。「じゃあ、おれの24年間は無駄だったというのか。おれにはおれの立場がある」

なごみ、苦惱、葛藤。ふるさととの映像や報道に交錯するのは、多面的な表情の深さである。

「拉致」と「核」 政治と個人の命

北朝鮮が9月「濃縮ウランの開発」を米に認めていた事実を、米政府は日朝正常化交渉前というタイミングで公表した(10月16日)。米のイラン攻撃が焦点化する国際情勢・世界

構造の中で、新たな緊張をはらむ米朝の駆け引きがある。「拉致」がすでに外交カードと化した危うさもある。25日、フジテレビ（朝日・毎日新聞との共同会見）が流した、横田めぐみさんの実子、キム・ヘギョンさんの涙は、拉致問題の陰翳をさらに深くした。

そして、29～30日の（首脳会談後）第一回日朝正常化交渉は、「拉致」も「核」も前進をみなかった。だが特筆すべきは、拉致被害者家族を含めて、「成果なし」を非難するよりも、政府・外務省の「原則堅持」（拉致問題・核が最優先課題）の交渉姿勢を評価したことである。近代日本の外交史上、これほど一致した国民世論を背景にした交渉はない、という解説もあった。

転回

何かが転回する。

「柏崎市役所の職員はどうか

……」と市長の打診に、パソコン研修に前向き、というニュースが始まりだった。11月に入ってすぐである。3日 薫さんから「中大生のみなさまへ」という直筆のメッセージが「救う会」に届いた。

5日 安倍晋三官房副長官、中山恭子内閣官房参与が自宅訪問。記者会見で蓮池さんは、「親としては、まず子供が日本に来て、いままで子供たちに話してやれなかったことをじっくり話してやって……永住帰国をはじめとする問題について結論を出したい」と、第三国での家族再会案を排しつつ、「永住帰国」への意思を明確にした。

透さんは最も近くにあつて、弟の心を聴く、すぐれた分析者のようにみえる。「政治的な発言をしなくなった」「目がやさしくなってきた」のは、「北朝鮮の核開発」が明らかになつて以降にわかに、という指摘は重要である。「核開発問題を知り、向こうで学んだ北朝鮮とは違ったことを

していると感じたのではないだろうか」と。

こうも言う。「最初は同じ部屋で寝ていても日本人じゃないような気がした。徐々にそれが変わってきて、いまは兄弟愛、つて感じですよ」

自筆の「中大生のみなさんへ」も、同じ文脈で読めるだろう。

「立场上多くのことは語れませんが」とは、子供たちのこと、あるいはもつと微妙な問題もあるだろうか。重い言葉がかえつて後段を強化するように、「次回の白門祭に参加できればと考えています」という思いは強く伝わってくる。

帰国1カ月め（14日）の発言もみておきたい。北朝鮮外務省が「5人もどらないかぎり、日朝安全保障会議を無期延期」と発表し、また「週刊金曜日」の曾我ひとみさん家族の会見記事が明らかになった、同じ日である。蓮池さんは、

「向こうで本当のことが言えるわけがない。ひどい話だ」と「週刊金

曜日」を批判しつつ、語った。

「私たちの事件が単に一個人、一家族の問題でなく、本当に重大な国家間の問題であることを強く感じた1カ月でした」

太くひびいて、揺るぎがなかった。

——阿部三郎理事長は、日弁連・本林徹会長、および新潟県弁護士会・川上耕会長に人権擁護の観点からの協力を要請する書面を6日付で提出。元日弁連会長という経歴とも合わせ、多方面の取り組みを示すだろう。

19日には、中央大学広報課主催の「報道関係者との交流会」が開かれた。各社の記者たちの会話でも「蓮池さん問題」が話題にのぼった。

子供の帰還が成り蓮池さんが、「すべてを語る」日、

中央大学を訪問する日、は、いつ、どういう形で実現するだろうか。早いのか、時間を要するののか。いまはまだだれも「解」をもたない。